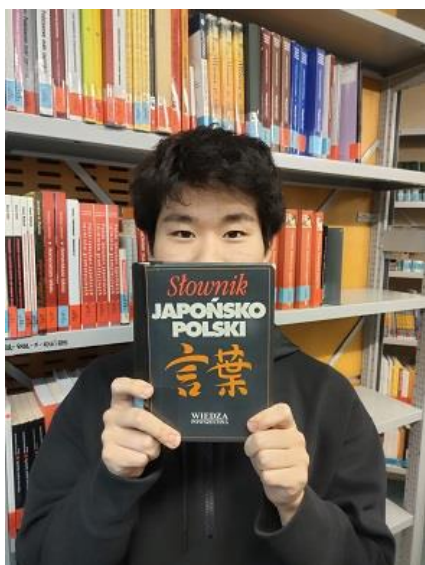
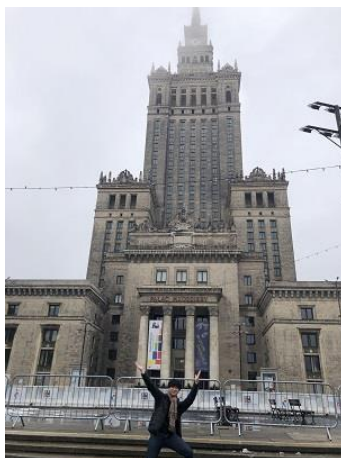


ポーランド留学・折紙の鶴が飛んだ日



現代政策学部4年茂田です。ポーランド・ウッチ大学への半年間の留学を終え、無事に帰国することができました。まずはお世話になった多くの方々に心より感謝申し上げます。当初私は2年次秋学期より交換留学を希望していました。1年次はオールイングリッシュのフレッシュマンセミナーを選択、同年TOEICの基準をクリアし、入学当初より留学を見据えたゼミ選択及び学生生活の設計をしていました。しかしながら、未曾有のコロナ禍による2年間の延期や隣国ウクライナが軍事侵攻されるなど、留学せず卒業する可能性も大いにありました。一時期は大学に頼らず留学エージェントへの相談及び単独で現地の語学学校へ行く算段を整えていましたが、政府より渡航中止の決定が相次ぎました。

自粛期間中は専攻研究であったポーランドにおけるポピュリズムについての情報収集や卒論の執筆をするも、時間をただ浪費する感覚が脳にへばりつき、意気消沈していました。ただ、渡航希望を持ちながら留学を諦めざるを得なかった友人達や、本校からウッチ大学へ交換留学生を送り出したケースが少ないこともあり、「城西大学から留学へ行く」という信念が徐々に強まり、4年次後期での渡航に踏み切りました。



留学期間中に印象に最も残った点はやはりウクライナ侵攻の陰が常にあったことです。2022年末ポーランド東部プシェボドフ近郊にミサイルが着弾し、調査段階ではNATO第5条が発動するのではないかという心配や陰謀論などが国内を駆け巡りました。私の住んでいた寮内でも学生らが寮外に出て話し合いや不安を吐露する光景が見られました。ポーランドは歴史的にロシアと友好関係にあらず、特にウクライナ侵攻

が始まるとそのよう感情は日常生活に顕著に表れていました。ポーランド伝統料理であるピエロギを提供する店では、基本的なピエロギの一種である「Pierogi Ruskie(ロシアのピエロギ)」の名称を「Pierogi Ukraińskie(ウクライナのピエロギ)」と変更するケースも少なくありませんでした。同様にポーランドはウクライナ難民の受け入れ数が世界トップであったこともあり(伝統的にウクライナの学生も多い)、留学先のウッチ大学においてもウクライナ出身の学生が多く在籍しています。私が選択した国際関係学部では加えてロシア人や旧ソ連圏出身の学生も多数おり、この「戦争」や因縁をどう捉えるのかという点をリアルタイムで多様な視点から吸収することができたことは私の財産であるといっても過言ではありません。感情をそのまま表現できないことに苦しむロシア人学生やウクライナ人が講義中に涙する場面にふれ、日本では当たり前となっている言論の自由性・安全性についても考え直す機会となりました。



また、留学は概ね孤独や自問自答と闘う日々であり、語学面でも悩まされました。基本的に学内では英語が通じますが、学外ではほぼ全く通じませんので、市内で手続き等がある場合は自分の言いたいことのスクリプトを準備し、見せながら説明するということをしていました。講義においては、心配性の性格もあり、一つの講義予習に5時間程かけてノートを作り、毎週1冊は本や論文集に目を通すことを課す講義に泣かされました。試験期

間の方が平常授業より楽だったという体験をする程でした。課題や卒論に追われる日々を通じて、論文の要旨の読み方やノートの作り方などの学問的な範囲の外で学びを習得するとともに、自ら進んで意見を言わなければ、存在しないことと同じであるということを経験しました。

交友関係においては、ポーランド語を履修していた交換留学生同士で交流を持つことが多く、週に必ず二回以上共に食事をする習慣をつくり、様々な地域の政治・宗教・文化や愚痴を交わす仲となりました。度々一緒にピオトルコフスカ通りの雪中を歩いた夜のことは忘れません。城西大学に留学経験のあるポーランド人の知り合いにも支えられ、孤独と文字通りの寒さの中でも心温まる生活を過ごすことができました。



本留学はコロナ蔓延により学校にも登校できず、自分のしたいことが満足にできない大学生活を経験し、遣る瀬無い思いで悶々と過ごしていた過去の自分を吊りたいという思いで臨みました。結果的に2年間待ったことで素晴らしい人々に巡り合い、専攻である国際関係学の視野を広げるだけでなく、臆病な自分の殻を破ることができました。全ては一期一会であり、予測できないことが自らに降りかかってきた際に納得のいく方向転換ができるかどうかということに尽きると考えます。困難に直面しても少し考え方を変えることで、深刻にならず、ステップアップの礎になるということを理解した4年間でした。

最後に私が交換留学をする後押しとなった出来事の一つに1年次の夏にNGOとして行ったアフリカ・ケニアのスラム学校へのボランティア活動があります。当時私は長期留学に不安を持っていたため、短期で海外に触れてみようと思い立ち、ゼミの学友と共にケニアへ行きましたが、その際スラム学校の学生に折紙の折り方を教えようと折った鶴が一羽あります。留学の相談や説明会などで配布・作成した資料を纏めるファイル末尾にその鶴を入れ、渡航したい気持ちを忘れないようにと、3年の月日経ちました。飛行機に搭乗したあの日、その鶴を見て報われたような気がしました。

